

平成 21 年 5 月 15 日現在

研究種目：基盤研究（B）

研究期間：2005～2008

課題番号：17320139

研究課題名（和文）

「仕事」の多様性と変容に関する人類学的研究—ジェンダー視点による国際比較

研究課題名（英文）

Anthropological studies of the diversity and transformation of “work” :
International comparison with a gender perspective

研究代表者

中谷 文美（NAKATANI AYAMI）

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：90288697

研究成果の概要：本研究では、日本、オランダ、イタリア、ブルガリア、マレーシアという5つの異なる社会において、広い意味での「仕事」をめぐる事象や社会通念が、それぞれの社会におけるジェンダー規範や政治的・経済的变化との相互作用の中で、どのように変容し、あるいは維持されてきたかという問題を比較・検討した。その結果、何が仕事で、何が仕事でないか、といった区分も含め、多様な労働観が各社会に存在すること、また急速な産業化、政治体制の変化、社会政策の展開などが、仕事の水準をめぐる規範や特定の労働の担い手などに変化をもたらす過程を明らかにできた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2005年度	4,000,000	0	4,000,000
2006年度	4,100,000	0	4,100,000
2007年度	4,000,000	1,200,000	5,200,000
2008年度	1,200,000	360,000	1,560,000
年度			
総計	13,300,000	1,560,000	14,860,000

研究分野：文化人類学

科研費の分科・細目：文化人類学 文化人類学・民俗学

キーワード：仕事の人類学 労働 性別分業 社会政策 国際比較 ワークスタイルの多様化
ヨーロッパ アジア

1. 研究開始当初の背景

研究代表者の中谷文美は、女性労働を主要テーマとしたインドネシア、バリ社会での調査を通じ、儀礼遂行など収入に直接結びつかない活動の重要性に注目してきた。その後、オランダでの予備調査を経て、より広義の「仕

事」をめぐる概念と実態について、人類学的手法による複数社会の比較研究を着想した。連携研究者（当初研究分担者）の宇田川妙子は、南イタリアの地方都市を中心に、主としてセクシュアリティや男性性のあり方に焦点を当てた研究を実施してきたが、従来固定的

といわれた性別分業の実態とその変容の可能性を探るとともに、イタリア社会における労働の意味を明らかにすることに関心を持った。石川登は、マレーシア、ボルネオ島南西部での調査経験を踏まえ、国境を越えた移動労働に注目し、とりわけ都市化を伴わない産業化を経験した地域における、本来の多様な仕事概念と、画一的な工場労働のあり方との間の格差を問題化しようとした。金野美奈子は、近代産業社会の職場形成におけるジェンダーというテーマの下に、日本の女性事務職員の歴史的な位置付けを考察してきたが、その後職場における男性性の意味の形成と歴史的変容に関心を移した。さらに研究協力者として、ブルガリアの農村ムスリム社会において、社会主義時代・ポスト社会主義時代を通じての仕事概念や実際の労働形態の変化をテーマとする松前もゆるを加え、相互の予備的ディスカッションを重ねることによって、本研究の骨格を作り上げた。

また、本研究開始時点で、日本社会において就労意識やワークスタイルの多様化や若年労働者の不安定雇用の問題などが徐々に注目され始めていたことから、本研究の意義を改めて認識した次第である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、本研究では、日本、オランダ、イタリア、ブルガリア、マレーシアという5つの異なる社会において、広い意味での「仕事」をめぐる事象や社会通念が、それぞれの社会におけるジェンダー規範や政治的・経済的变化との相互作用の中で、どのように変容し、あるいは維持されてきたかという問題を比較・検討することにある。とくに、生産労働・再生産労働という区分ではとらえきれない社会的活動（儀礼の準備・実施、世帯間関係の維持など）も含めた広義の「仕事」

に具体的に何が組み入れられ、どのような評価を与えられるのか、異なる行為の間にどのような序列が想定され、担い手はどのように区別されるのか、といった問題を、個別社会の文化的社会的文脈に沿って明らかにすることを旨とする。

3. 研究の方法

当初3年間は、毎年各メンバーがそれぞれの研究対象地域（オランダ、イタリア、ブルガリア、マレーシア）においてインタビュー調査、参与観察調査、関連文献・統計資料収集を含む人類学的フィールド調査を実施した。日本については、資史料収集・分析と理論的考察を中心に、生活面も含めたワークライフ・スタイルの多様性についての記述枠組みの検討も行った

地域の実情および研究遂行者の関心を踏まえ、地域ごとに個別の調査テーマを設定したが、共通の事項についても全員が考察を行った。

また、毎年2～3回にわたって研究会を実施し、本研究の研究対象地域と共通する属性を持つ社会を専門とするゲストスピーカーも交えて研究成果の発表、討論を実施した。

4. 研究成果

本研究では、「仕事」にまつわる語彙の中に経済活動の範疇に入る行為（狭義の仕事/労働）とそうではない行為（家事・育児・社交など）がどう位置づけられるか、またそれらの行為の評価枠組みや担い手の固定化/流動化などに注目して比較研究を行った。その結果、以下のような知見が得られた。

(1) 異なるタイプの仕事の階層化や担い手・役割期待の変化は、産業化（ボルネオの熱帯雨林地域）、ポスト社会主義化（ブルガリア農村のブルガリア語話者ムスリム居住地域）、EUの政策などさまざまな要因によって引き起こ

される。ただし、要因が共通していても、たとえばEU内のイタリアとオランダ、新規加盟国のブルガリア、あるいは同じく社会主義体制下にあったブルガリアとウズベキスタン、キューバなどを比較した場合、個々の社会に従来から見られたジェンダー規範や社会文化的慣行との相互作用の中で、有償労働（とくに賃金労働）を特権化ないし特別視する構造のあり方には違いがある。

(2) 同じ有償労働であっても、それを「誰のために」（夫/母/祖母として家族/子/孫のために）遂行するのか、「どこで」（家の中/外、村内/都市/国外）遂行するのか、という要素がその労働への肯定度や担い手への評価を左右しうる。さらに、各社会に固有の評価軸（イタリアの従業員としての雇われ労働

(dipendente) vs 自営の自律的労働

(autonomo)、ブルガリアの労働手帳に記載される労働とそうでない副業的労働など）も存在する。

(3) さらに、収入の有無とは別に、関係性の維持（親子・親族関係、地域での世帯間関係、コミュニティ内の政治的ネットワークなど）にまつわる活動への従事の重要性が認められている社会は多いが、その活動と有償労働との関係性や、性別世代別振り分けは社会によって大きく異なる。

(4) 仕事にまつわる語彙には各社会独自の構成と意味づけがあり、一律に仕事/労働、あるいは英語でいうwork/labourの区分に重ねることはできない。たとえば：

① イタリアではこの区分自体が当てはまらない。イタリア語ではworkに対応する言葉がなく、labourと同じく語源的に苦役のニュアンスを含むlavoroが広く用いられる。

② ボルネオでは賃金労働の普及を背景に、従来の広義の労働を示す言葉と貨幣経済に直結する言葉の関係性が当該地域を構成する複数

の民族の間で一致しない状況がある。

③ オランダでは、werk/arbeidの対比がある程度work/labourに重なり合うものの、宗教的背景と結びつくberoep（天職・職業）という概念がとくに女性の家事・育児労働を評価する上では重要である。

(5) 文化人類学では従来、個別社会の構成メンバーが従事する労働を生業という枠組みでとらえ、社会の枠を超えた比較研究を行うことが多かったが、本研究では、人類学的手法を用いながらも、市場労働、雇用・賃金労働のただなかにある人びとの労働生活に、より広義の「仕事」という観点から分け入ろうとした。現代日本の労働状況と切り結べるような議論をさらに発展させる上でも、このアプローチは有効であることが明らかになった。

(6) 本研究の成果を土台としつつ、より広範な地域・事例を対象とした研究を継続するため、国立民族学博物館共同研究のひとつとして「ジェンダー視点による『仕事』の文化人類学的研究」を平成20年10月より発足した。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計12件）

① 宇田川妙子「空間から社会を再考する：「多」と「個」の人間観・社会観に向けて」国立民族学博物館機関研究プロジェクト国際フォーラム『ライフデザインと福祉（WELL-BEING）の人類学：開かれたケア・交流空間の創出』報告書，pp. 124-130, 2009, 査読無。

② 宇田川妙子「イタリアの食をめぐるいくつかの考察：イタリアの食の人類学序説として」『国立民族学博物館研究報告』33(1), pp. 1-38, 2008, 査読有。

③ ISHIKAWA, Noboru “State-Making and transnational Process: Trans-boundary Flows of Resources in a Borderland of

Western Borneo”, *Transborder Environmental and Natural Resource Management* (Wil de Jong ed.), *CIAS Discussion Paper* No. 4, pp. 117-128, 2008, 査読無.

④松前もゆる「ブルガリアの『色彩豊かな』村：ポマク女性の装いと暮らし」『季刊民族学』126, pp. 26-39 頁, 2008, 査読有.

⑤中谷文美「『わたしの布は誰のもの？』－インドネシア伝統染織のくファッション化をめぐって」『社会人類学年報』33 巻, pp. 1-32, 2007, 査読有.

⑥ISHIKAWA, Noboru “Commodities at the interstices: Trans-boundary flows of resources in Western Borneo” *Asia-Pacific Forum* No. 36, pp. 146-170, 2007, 査読有.

⑦金野美奈子「開かれたジェンダー理解のために」『国際文化学研究』28 巻, pp. 1-33, 2007, 査読無.

⑧中谷文美「ミシンは女性を解放したか－インドネシア女性にとっての裁縫労働の意味－」『女性歴史文化研究所紀要』14 号, pp. 11～20, 2006, 査読無.

⑨宇田川妙子「アイデンティティ概念の再構築の試み：イタリア人アイデンティティという事例とともに」『国立民族学博物館研究報告』30 巻 4 号, pp. 455-492, 2006, 査読有.

⑩KONNO, Minako “Reconceptualizing gender equality: A pluralist view” 『*Kokusaibunkakenkyu*』27 号, pp. 29-49, 2006, 査読無.

⑪金野美奈子 「ジェンダー公正と多元的規範論－家族をめぐる Rawls－Oku 論争を手がかりに」『国際文化研究』26 号, pp. 1-26, 2006, 査読無.

⑫KONNO, Minako “La construction historique de la femme employe de bureau au

Japon” *Le Mouvement Social* 210, pp. 29-54, 2005, 査読無.

[学会発表] (計 13 件)

- ①ISHIKAWA, Noboru. “Resilience and Regime Shift: Metamorphoses of a Biomass Society in Sarawak, Malaysia, Poster Presentation”, the 2nd GCOE International Conference, Biosphere as a Global Force of Change, 10 March 2009, Kyoto.
- ②NAKATANI, Ayami, “The Culture of housework: Women as mothers and housewives in the Netherlands, Japan and Indonesia” IRCJS-GCOE Joint Symposium / 日文研・京都大学 GCOE 共催国際研究集会 『Asian Gender Under Construction: Global Reconfiguration of Human Reproduction / いま構築されるアジアのジェンダー：人間再生産のグローバルな再編成』2009 年 1 月 9 日, 国際日本文化研究センター、京都.
- ③NAKATANI, Ayami, “Combining work and care: Dutch practice and its implications for Japan”, International Conference, Northeast Asia and Regional Integration, 2008 年 12 月 14 日, 岡山大学大学院社会文化科学研究科.
- ④NAKATANI, Ayami, “Work, motherhood, and ‘emancipation’ in the Netherlands”, the 107th Annual Meeting, American Anthropological Association, 21 November 2008, San Francisco.
- ⑤宇田川妙子「人の断片化か、新たな関係性か：イタリアの生殖技術論争の事例から」GCOE プログラム生存基盤持続型発展を目指す地域研究拠点イニシアティブ 4 「地域の知的潜在力研究」2008 年 11 月 4 日, 京都大学.

- ⑥中谷文美「<主婦>の仕事、<母の仕事>としての家事：オランダ・インドネシアの事例から」国際日本文化研究センター共同研究会「アジアにおける家族とジェンダーの変容：近代化とグローバル化の時代に」、2008年7月26日、国際日本文化研究センター、京都。
- ⑦中谷文美，分科会企画・発表：「趣旨説明—仕事の人類学の拓く地平」「オランダ社会における主婦の<仕事>、母の<仕事>」日本文化人類学会第42回研究大会，2008年6月1日，京都大学。
- ⑧宇田川妙子「ジェンダーの視点からみる労働という概念：イタリアの事例をもとに」日本文化人類学会第42回研究大会，2008年6月1日，京都大学。
- ⑨石川登「東マレーシア北部流域社会における「仕事」の諸相：マレーシア、サラワク州のイバンならびにシハン社会から」日本文化人類学会第42回研究大会，2008年6月1日，京都大学。
- ⑩松前もゆる「ブルガリアにおける「仕事」の布置と社会変容：社会主義、ポスト社会主義からEUへ」日本文化人類学会第42回研究大会，2008年6月1日，京都大学。
- ⑪ ISHIKAWA, Noboru “Commodifying Bornean Forest: From jungle produce to agro-industry in the Kemena Basin, Northern Sarawaku” Canadian Council of Southeast Asian Studies, Biennial conference, 19 October 2007, University of Laval, Quebec, Canada.
- ⑫中谷文美「仕事にみえない仕事：「仕事への文化人類学的アプローチ」第11回作業科学セミナー，2007年12月1日，倉敷芸文館アイシアター，倉敷市。
- ⑬KONNO, Minako “Reconceptualizing Gender Equality: A Pluralist View”, XVI World

Congress of Sociology, International Sociological Association, 29 July 2006, Durban, South Africa.

〔図書〕(計 14 件)

- ①宇田川妙子編著『多元的共生を求めて：<市民の社会>をつくる』(未来を拓く人文・社会科学14) 東信堂、全192頁、2009。
- ②中谷文美『『女の仕事にはきりが無い』——バリ女性の働き方』『変わるバリ、変わらないバリ』(倉沢愛子・吉原直樹編) 勉誠出版、167-185頁、2009。
- ③石川登『境界の社会史——国家が所有を宣言するとき』京都大学学術出版会、全360頁、2008。
- ④中谷文美「働くことと生きること——オランダの事例に見る「ワーク・ライフ・バランス」『働くこととジェンダー』(倉地克直・沢山美果子編)世界思想社、214-239頁、2008。
- ⑤中谷文美「国家が規定するジェンダー役割とローカルな実践—インドネシア」『ジェンダー人類学を読む』(宇田川妙子・中谷文美編)世界思想社、20-46頁、2007。
- ⑥宇田川妙子「地域の<門番>概念としてのジェンダー・セクシュアリティ」『ジェンダー人類学を読む』(宇田川妙子・中谷文美編)世界思想社、120-143頁、2007。
- ⑦宇田川妙子「ヴェドヴァの「力」の背後にあるもの：イタリアの寡婦」『やもめぐらし：寡婦の文化人類学』(椎野若菜編)明石書店、122-148頁、2007。
- ⑧中谷文美「バリの<結婚したがる女>たち—増える役割と変わらぬ規範のはざままで」『ミクロ人類学の実践』(田中雅一・松田素二編)世界思想社、200-237頁、2006。
- ⑨NAKATANI, Ayami “The Emergence of ‘Nurturing Fathers’” *The Changing Japanese Family*, M. Rebeck & A. Takenaka eds., Routledge, pp.94-108, 2006.

⑩宇田川妙子「イタリア社会研究と「市民社会」概念」『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』（伊藤亜人先生記念論文集編集委員会編）風響社、247-263 頁、2006.

⑪石川登「マイクロ・トランスナショナルリズム：ボルネオ島西部国境の村落社会誌」『現代インドネシアの地方社会：ミクロロジーのアプローチ』（杉島敬志・中村潔編）NTT出版、214-232 頁、2006.

⑫松前もゆる「装いの政治、日常の装い」『東アジアからの人類学：国家・開発・市民』（伊藤亜人先生記念論文集編集委員会編）風響社、121-136 頁、2006.

⑬P. N. Abinales, Noboru ISHIKAWA & A. TANABE (eds.) *Dislocating Nation-States: Globalization in Asia and Africa*, Kyoto University Press, 289p, 2005.

⑭金野美奈子「職場と家族のはざままで」『福祉社会の歴史—歴史と変容（講座・福祉社会 2）』（佐口和郎・中川潔編）ミネルヴァ書房、259-280 頁、2005.

〔その他〕

『文化人類学事典』（日本文化人類学会編）中谷文美編集担当：第5章「働く」170-215頁、項目執筆「概説」（170-71頁）「家事」（180-181頁）「失業」（210-211頁）、丸善、2009.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中谷 文美 (NAKATANI AYAMI)

岡山大学・大学院社会文化科学研究科・教授

研究者番号：90288697

(3) 連携研究者

宇田川 妙子 (UDAGAWA TAEKO)

国立民族学博物館・先端人類科学研究部・准教授

研究者番号：90211771

石川 登 (ISHIKAWA NOBORU)

京都大学・東南アジア研究所・准教授

研究者番号：50273503

金野美奈子 (KONNO MINAKO)

神戸大学・大学院国際文化科学研究科・准教授

研究者番号：20346232

(4) 研究協力者

松前 もゆる (MATSUMAE MOYURU)

明治学院大学・非常勤講師